

東日本大震災の被災者を精神的にケアする必要性から、傾聴ボランティアの活動が注目されている。東京教区が母体となっている財団法人「東京カリタスの家」（理事長・岡田武夫大司教）では毎年、孤独や心の病など、生きづらさをかかえる人たちの「いのちに寄り添う」ボランティアの養成に力を入れ、今年も「傾聴」を意識した「ボランティア養成講座」（全12回）を5月7日から開く。毎年、現場で働く講師の体験談を通して、実践的な学びができると好評だ。今年度の養成講座講師陣の中から、児童虐待の問題にかかわるクリスチャンの坪井節子さんと、ひきこもりの若者を支援している心理相談員、梅山明子さんに話を聞いた。

## 虐待児の実態

弁護士の坪井節子さんが理事長を務める社会福祉法人「カリヨン子どもセンター」では、虐待を受けた高齢児童（14歳～19歳）のために、東京都内で緊急避難場所（シェルター）と自立支援ホーム、さらにデイケア事業を行っている。

日本で初めてできたこのシェルターは、創設から7年で延べ180人が利用した。親に棄てられ、電気も水道も止められた“空き家”同然の家で暮らしていた子、親からの虐待を受けて家出し、“闇”の世界で売春の道具にされた子、また父親から性的虐待を受けた子など、皆、壮絶な人生を生きてきた。

坪井さんは、シェルターの目的をこう話す。

「親に棄てられた子どもたちが、生きる気力を取り戻すのは大変です。このシェルターでは、『あなたは大事な人』だということを伝えるため、短期集中で“愛のシャワー”を浴びせます。ここは、闇の底へと落ちていこうとする子どもたちを、『生きる』方向へ反転させる最後の底支えの場。まるで、救急救命治療センターのようなものです」

シェルターに居る期間は最長で2カ月。その間に、スタッフ、弁護士、医師、カウンセラー、行政職員、ボランティアなど、大勢の大人が連携し、子どもを“抱きしめ”る。

「一度も大切にされた記憶がない子どもたちは、最初は、自分が大事にされるということが信じられず、さまざまな方法で、私たちの愛情を試してきます。でも、大人たちが本気だということが分かってくると、『私、生きてていいのかも』と思えようになって、子どもの心に灯がともります」

虐待の後遺症を抱えた子どもも多いため、自立への道は困難が伴う。しかし、自分が大事な存在なのだ気付けば、希望につながっていく。

## ひきこもる若者たち

一方、いじめを受けた経験も、親からの虐待を受けたこともない、“普通の”若者たちが、大学生や社会人になってからひきこもるケースが増えている。横浜で活動するNPO（特定非営利活動）法人「月一の会」は、こうした若者たちの居場所づくりや社会参加、自立を支援して13年になる。

主宰者の梅山さんは、多くの若者と接してきたが、若者がひきこもる原因は、一言では語れないという。小さいころから親子関係が希薄である、勉強一筋で遊んだ経験がないなど、複合的な要素がからむ上、1人1人の背景も違うため、特効薬がないのが実情だ。

梅山さんは、ひきこもる若者たちについて次のように話す。

「共通点は、人間関係が苦手な人やうまくいかない人、『人が怖い』と思っている人が多いことです。基本的に人間関係の問題で、何度も仕事を辞めてしまっているのです。それが自信の無さにつながり、ますます社会参加ができなくなっています。でも心の中では、人とのふれあいや自分の居場所を求めているのです」

「月一の会」では、横浜市内の2カ所で居場所づくりをしているが、約80人が利用し、毎日20人以上の若者が集まってくる。同じ境遇で、同じ痛みを抱えた若者同士が集うため、安心感と思いやりに満ち、皆が心を開いて語り合う。

居場所があれば、若者は家から出るようになり、やがて「友達ができる」→「楽しい」→「交際費を稼ぐためのアルバイト」→「社会参加」へとつながっていく。日々、心の変化があり、1年ほどでステップアップしていくという。「若者の力ってすごいと思います」と梅山さんは語っていた。

※養成講座の詳細は、☎033943-726。